

## 最優秀賞

### 列車はつなぐよ どこまでも

伊藤 昭光

私は教員をしている。今年度、勤務している学校で、6年生と田植えをした。しかしそれはただの田植えではない。秋田内陸線から見える田んぼアートのための特別なものだ。それを見たいがために内陸線に乗車する観光客もいると聞く。そんな作業に関わるのだから、児童の責任は重大である。色苗を間違つて植えようものなら、すばらしいアートにはならない。観光客に喜んでもらえるような芸術作品にしたい。子どもたちも先生方もやる気満々である。

4 km程離れた現地には、自転車で移動する。安全確保のため、私も引率に加わった。

雲一つない日本晴れの中、自転車は新緑の中を移動する。夏を感じさせる風が快い。程なくして現地に到着した。

子供たちの目の前には気持ちよさそうな泥のプールが広がっている。すぐに入りたくて仕方がない。合図の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、「うあ〜」「きゃあ〜」「ひい〜」大きな歓声が辺り一面に響く。それがいつこうに鳴りやまない。足が泥に、はまって前に進めない子ども。わざと倒れこんでTシャツを真っ黒にしてしまう子ども。顔に泥で化粧する子ども。

様々である。

子どもたちの興奮は冷めやらぬが、アート作品は着々とできあがっていく。

そんな時だ。私の近くで子どもの怒鳴り声が聞こえた。「どうしてだよ！」なにやら2人が、もめている。理由は分からないが、早く行かなければ。

仲裁のために動こうと思ったその瞬間である。「ポ〜、ポ・ポ〜」甲高い汽笛が辺り一面に響いた。

子どもたちは、一瞬作業の手を止め、ミーアキャットのようになりを見回した。

次の瞬間、右前方の奥から「ガッタンゴットン、ガッタンゴットン」心地よい音を響かせながら、一両の列車がやってきた。たった一両である。小さくてかわいい。その車両が少しづつ大きくなってきた。

「ガッタンゴットン、ガッタンゴットン」音は次第に大きくなっていく。いつも見ている列車ではあるが、その日は様子が違った。

子どもたちの手前で、歩くようなスピードにまで減速したのだ。止まりそうな速度でゆっくりと。

私たちの前をかわいい車体は歩いていく。列車が線路でこんなにゆっくり動く様子など子どもたちも見たことがない。乗客の顔がはつきりと見える。お客さんは満面の笑顔だ。腕がちぎれんばかりにこちらに手を振ってくれている。

子どもたちもそれに応えて全力で手を振り返す。

ふと気がつくとき、もめそうだった2人も笑顔で手を振っていた。

る。そして列車が見えなくなっても手を振り続けていた。

「一番前に乗っていたおじさん、見た？」

「あの麦わら帽子のおじさん、かっこよかったね。角館で武家屋敷を見た後、果物屋でパフェを食べてきたんじゃない？」「孫にプリンやモンブランを買ったのかも。」「樺細工のお土産も買ったよね。」

2人の会話は盛り上がる。

「この後、どこにいくのかな。」「阿仁マタギ駅で降りて、くまぐま園へ行くんじゃない。自分たちも2年生の時に行ったよね。」「阿仁合駅で降りて、軌道バイクを運転するかも。鉄道好きならテッパンだね！」「森吉山もおすすめ。」

さつきまでの出来事がうそのように、いつしか談笑しながら田植えを続けていた。

秋田内陸線に関わる授業をすると、子どもたちが元気になっているような気がする。別の学校に勤務しているときもそうだった。

総合的学習で、角館駅から八津駅まで乗車。かたくり館前の川でカジカ採り。鎌足和紙を自分で漉いて、掛け軸を作成した。

この学習でも、すてきな出会いがあった。角館駅の駅員さんからは「どこさ、いぐどこだ？」声をかけられ、「八津です。」と子どもたち。「角館から三つ目の駅なのになぜが八つ」と駅員さんは、おどけてみせた。車内では、乗車態度が立派だと、お年寄りの夫婦からお菓子をクラス全員分もらった。

秋田内陸線は、人と関わることの楽しさ、ふるさとのすばらしさを感じさせてくれる。

今回の田んぼアートの田植えもそうだ。

内陸線の社員の方々、地元の方々の熱意、内陸線に乗車した方との交流。

人は、仲間がいるから、協力して物事を成し遂げることができる。周りで励まして応援してくれるから、一人でもがんばることがができる。

人との関わりが希薄になっているこの時代だからこそ、そこを大事にしたい。

たくさんの素敵な出会いが子どもたちを成長させる。

秋田内陸線は、元気をくれる列車、人を成長させてくれる列車なのだ。

後日、あの列車に乗っていたという埼玉県の夫婦から手紙を頂いた。車窓から見えた本校の子どもたちがあまりにもかわいく、元気をもらったという内容であった。手を振ってくれたことがうれしかったらしい。手紙には列車から撮った写真が添えられていた。

そのお手紙と写真は今でも教室に飾られている。

送られてきた写真に、肩を並べてうれしそうに見入るあの2人。よき友人としてこれからも成長していくことを期待している。